

山つつじの丘

四月十八日（昭和五十六年）は麗かな好天であった。斎藤清衛先生の四十九日の法要がご郷里の山口県で営まれる日である。三十五日は、すでに川崎のご自宅で済まされていた。ほぼ関西以東在住の方々が参集されたと聞く。四十九日の方は、ご遺族・ご親族が中心で、隣県に住む関係から、門弟代表の形で私が参列することになった。八時四十五分広島発の小郡行き普通列車に乗り、岩田駅で降りると、同じ電車に途中から乗った浩君夫妻がホームの向こうから笑顔で近づいてきた。あらかじめ電話で打ち合わせがしてあったのである。もしそうでなければ、三十年前に来た時とは、駅前の様子がすっかり変わっていて、私は途方に暮れたかも知れない。

斎藤家のあった昔の岩田村は、現在は熊毛郡大和町岩田となっている。菩提寺の浄国寺は同じ町の三輪にあり、法要はそこで営まれた。参会者は、奥さん、浩・昌君両夫妻、先生の令弟江田周三氏夫妻、本家の国光徳氏、その他近親の方々数名のお顔が見えた。大正九年、父君と兄君の相つぐ逝去により、先生は急遽埼玉師範を退いて、父君経営の高水村塾を継承されることになっ

た。その時の数え子第一号の玉木俊雄氏に、その席でお会いしたのは、全くの奇縁であった。

齋藤家の墓地は、岩田の小高い丘の上にあつた。ご先祖の墓に並んで、先生がお入りになる場所がすでに用意されていた。折から山つつじの花盛りで、鶯が美しい声で、納骨の仏事の間中、すぐ耳許で鳴きつづけていた。先生の大好きな大地に、先生がお帰りになるのを、恰も寿ぐかのやうに。

私は、「淨池院清誉智蓮居士」と墨書された、新しい白木の墓標の前の花筒に、山つつじの一枝を挿し添えて、山を下った。

(五七・二)